

花みづき

第25号/2011.4.1

白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL042-346-5626

「書くことのすすめ」

子ども学部 家族・地域支援学科 教授

教育・福祉研究センター長 山路 憲夫



読書は楽しい。書くのは苦しい。
書くことを長年職業としてきた私でさえ、今もそうだ。
苦しければ書かなければいいのに、といわれそうだが、
書きあげたときの解放感は格別なものがある。書いてい
ればこそ、読書も一層楽しくなる。だから両方もやめ
られない。

その経験を振り返ってみたい。

活字の魅力

読書する楽しみを最初に知ったのは、小学校5年の頃
だった。それまでは子ども雑誌に連載されていた「鉄腕
アトム」や「背番号ゼロ」といった人気漫画に夢中だ
った。「貸本屋」に出入りするようになり、漫画を読み漁
った。そのうち児童向けの「世界文学全集」や「日本文
学全集」、世界や日本の「偉人伝」があるのに気付いた。

「15少年漂流記」や「ロビンソン・クルーソー」は
読みだすと、面白くてやめられない。「エジソン」「野
口英世」といった伝記も読み始めた。その貸本屋にあ
った児童向けの小説や伝記ものをほとんど読み終えると、
それまでは見向きもしなかった小学校の図書室にあった
グリムやアンデルセン童話もなかなか面白いのに気付
いた。いろんな知識も知らず知らずのうちに身についた
のだろう。それまでは野球の選手になるのが夢だった
のが、小学校卒業時の文集には「シュバイツァーのよう
な社会に役に立つような仕事に就きたい」と気負って書
いた記憶がある。

大学受験時期になってからも、本好きの友人たちと情
報交換をしあっては、漱石や太宰治、武者小路実篤、松
本清張といった作家の小説を後ろめたい思いをしながら
読みふけた。

大学卒業後の就職先に新聞社を選んだのも、そうした
読書体験と無縁なことではなかったのだろう。

書く苦しさ楽しさ

1970年に毎日新聞社に入社、最初の赴任地が九州の
大分市。見ることも聞くことも日々新鮮で、仕事が面白
くてたまらなかった。夢中で走り回り、記事にした。時折、
反響があるのもうれしかった。

しかし、少しずつ仕事に慣れてくると、文章を書くこ
との難しさが徐々にわかってきた。読むことと書くこと
とは当然違う。書くとなると自分なりに構成を考え、誰
でもわかるような（新聞の場合中学二年生程度にもわか

る文章を書けと教えられた）文章を書かなければなら
ない。もちろん簡単な事件事故や行事モノの原稿は慣れ
れば誰でも書けるが、長い企画モノの文章やコラムとな
るとそうはいかない。頭をぶつけ、抱え込むこともしょ
ちゅうだった。

以来33年、文章を書くことの難しさとの戦いの連続
だった、といっても過言ではない。

いくら慣れても、すらすらと書けるわけではない。で
きるだけ文章を書くための「肥やし」、下地を日頃から
蓄える。そのためには取材と読書は欠かせない。

読書と書くことは表裏一体

その意味で読むことと書くことは確かに違うけれど
も、密接につながっている。

33年間勤めた新聞社を03年退職した時、新聞という
メディアで働く緊張感、文章を書くことの重荷から、よ
うやく解放されたが、その一方で、読書する緊張感もや
り薄れた。今度こそ好きな読書を楽しめると本に手にし
ても、なかなか読書に身が入らないのだ。

読書する時でも、書くための肥やしを仕入れるとい
う意識が知らず知らずのうちに身についていたのかもしれ
ない。

大学の仕事に慣れるにつれ、読書を楽しむ意識も次第
に戻ってはきた。

外部からの原稿も積極的に引き受け、できるだけ書く
という機会を作るようにしたのも一因だったようだ。書く
ようになると、日頃から材料を探す。読書にも身が入
る。ジャンルの違う読書、読書から得られた知識は、書
くテーマと一見無関係に見えても、その文章を書く上で
役に立つ事がしばしばある。

繰り返しになるが、日記であれなんであれ、書くこと
によって読書する楽しみもいっそう増す。

書くことで自分を見つめ直すことにもなる。さまざま
な現代社会の問題を考える機会にもなる。

学生諸君にもできるだけ自分で書く機会を作るよう
勧めたい。

最初は書こうとしてもなかなか書けないかもしれない
が、書くことを日頃から心がければ、自然と読書するよ
うにもなる。書くことと読書の習慣が身につけば、かけ
がえのない生涯の伴侶ともなる。

何でもいい、とにかく明日からでも書いてみよう。

図書館利用を回想する

子ども学部 子ども学科 講師 栗原 淳一

図書館は子どもの頃から身近にありました。今までの図書館利用を回想すると、その時々で、素敵な本との出会いがあったのだと再認識します。

記憶にある最初の図書館利用は、幼稚園の頃です。私が通っていた幼稚園には、図書館というよりは図書室があり、さすがに規模は小さかったのですが、たくさん絵本がありました。「チャイクロ」という、とても気に入った本との出会いがありました。時間があれば「チャイクロ」を開いていましたし、家でも読むために借りて帰った覚えがあります。科学者が色を混ぜる実験をしている場面や、未来の車が走っている場面に引き込まれていったことを今でも覚えています。絵本を眺めている落ち着いた時間ではありましたが、ワクワク・ドキドキする時間だったような気がします。

小学生になると、学校の図書館や近所の児童図書館の利用カードを作りました。そのカードに、借りて読んだ本の名前を記録していくことも楽しく、友達と競って本を読んだ記憶があります。「日本の歴史」、「伝記」、「シートン動物記」、「三毛猫ホームズ」などのシリーズものを片っ端から読み込み、その世界にどっぷりと浸かることに楽しさを覚えました。

中学生になり、理科の授業で太陽系や銀河系についての学習をしたことをきっかけに、天文現象に興味をもった私は、市の図書館に通うことが多くなりました。というのも、ここの屋上には、天体ドームが設置されていて、観望会が開かれることが多かったからです。当時、望遠鏡で夜空を見ることが出来る施設が少ない中で、惑星や月、星団や星雲を見ることができたこともあり、部活動の帰りに寄り込んでいました。当然、その図書館には膨大な天文関係の書籍がありました。「星座ガイドブック」、「星

の一生」など、非常に興味をもって読みあさったことを覚えています。このことが、後の研究の基礎になったことは間違いありません。

高校生になると、図書館は専ら受験勉強の場となってしまうましたが、休憩時間に天文書を読み、数式を使って星の構造を探る手法に楽しさを覚えました。

大学生になり、大学附属の図書館を見たときには、その大きさと風格に圧倒されたことを覚えています。図書館に足を踏み入れると、専門書がずらりと並んでいて、今までの図書館とは全く違う雰囲気になりました。1冊読むのにもとても時間がかかりましたが、読むというよりは読み解くという楽しさがありました。大学2年生になると物理・化学・生物・地学の実験書を借りては実験し、理論と観察・実験がつながる面白さに気付きました。大学3年生～大学院生では天体物理学を専攻し、観測データを解析するようになりました。国立天文台の共同利用観測申請をし、約2週間の泊まり込み観測を年に2回行いました。天体観測を行う上で必要となるものが、星々の天球上での位置や光度を表した「星図」です。国立天文台図書館の星図をコピーして手元に置き、観測室のモニターに映し出された星と照らし合わせて、対象の星を確認して観測します。観測をしていると、星図には無い星が出現することがあります。1993年、カシオペア座に出現した新星に出会った時は、図書館に無い、世界で一番新しい情報を目の当たりにしているという感動と興奮が身を包みました。また、この時期は、海外の文献資料を手に入れることができるという点で、図書館の新たな利用方法に出会った時期でもあります。

今では、研究のための資料収集に図書館を活用しています。今後、少し時間がとれるようになったら、絵画や美術品などの紙上鑑賞や情報検索などもしていきたいと思います。

いつも傍らにある図書館は、その時、その時、私の知的好奇心を揶ってくれる素敵な場所です。

「通信制大学での思い出と、 大学図書館について」

子ども学科4年 萩原 稔

私は白梅学園大学に3年次編入学で入学しましたが、それまでは会社員として社会人生活をしていました。会社での勤務経験を重ねるうちに、営業活動の実力や職場組織の調整力などが、必然と問われるようになってきました。そのような中でビジネスマネジメントの基本を学び、職能スキルの向上に結び付けていきたいと考え、白梅学園大学の編入学以前にも、経営学系統の通信制大学に入学して学んだ経験がありました。

通信制大学での学習は、全取得単位の1/4は大

学で週末や夏季などに行われる集中講義を受けて学習しますが、残りの3/4は大学から配布された教材を基に、自習にて学習することが基本になっています。これを「通信学習」と呼びますが、授業に代わる教科書を自分自身で読み進め、課題を作成しなくてはなりません。そのために教科書だけの学習では不十分になるので、その他にも数多くの文献や資料などに触れる必要性がありました。

土曜日や平日の公休日などで会社の勤務が無い日は、よく大学図書館に通いました。時には午前中に入館して、夜の閉館間際まで過ごしたこともありましたが、しかし大学の図書館に通うことは決して苦行ではなく、



本は人と人を繋ぐ

大学院子ども学研究科 子ども学専攻 博士課程
寒河江 芳枝

2008年4月、私は白梅学園大学大学院子ども学研究科子ども学専攻修士課程の1期生として入学しました。私の当時の関心は、大学院の授業が、どのようなものなのか？ということでした。またゼミは、どのように進められるのか？院の学生たちは、どんな人たちなのか？私は、まるで幼稚園に入園する子どものように期待と同時に不安を募らせ学生生活をスタートしました。

4月中旬頃から始まった授業では、先生方から様々な本を紹介していただきました。本のタイトルをメモしながら図書館へ行き、その本をよく手にしたものでした。

また、私は1年目と2年目は金田ゼミ、3年目は佐久間ゼミでご指導を受けました。どちらの先生も多くの本を紹介していただきました。私は、その都度図書館へ足を運び、嬉々として本を読んだものでした。特に修士論文を作成していたときには、今この本が必要であると思うと図書館へ走って行き、息を少し切らせながら本を探しました。白梅学園の図書館では、それらの本をほとんど手にすることができました。論文を書いているときには、

平穏に保っている自分であってもなにか気持ちに焦りがあり、必要な本が今すぐ手元にほしいと思うものでした。図書館のスタッフのみなさんが、非常に細かな配慮をしてくださったおかげで、その私の焦りの気持ちが消え去りました。保育の勉強をしている方たちはお分かりだと思うのですが、



日々忙しく会社での勤務を繰り返していた生活の中で、私にとっては非日常的な、ささやかな楽しみであったように感じられました。

大学のキャンパスには、会社とは違った「自由」の雰囲気が溢れていました。現役の若い学生に交じって図書館内で学習したり、学生食堂でくつろいだり、構内の至る所で生き生きとした表情で語らいや団欒をして過ごしている学生の姿を目にする度に、大学で学ぶことに喜びを感じたものでした。会社を退職して白梅学園大学に編入学したのは、通信制大学に在籍していた時代の学習経験とキャンパスで過ごした様々な思いが、背中を押したのではないとも言えるかも知れません。

私が大学図書館を利用してきた中での経験談ですが、まず大学図書館で魅力的なのは、専門分野の書

まさに何ごとを行うにしても環境がいかに整っているかということが重要になってきます。

そして、授業やゼミを通して読んだ本を媒介に院生の人たちとも少しずつ交流することができるようになりました。例えば、「先日、〇〇という本を読みました。子どもの姿が細かく書かれていてとても良かったです。」という私の発言から、「では、私も読んでみる。図書館のどこにあった？」という返事が返ってきたり、今度は逆に院生の人たちから、「寒河江さん、〇〇という本を読んだことがある？すごく良い本だったわよ。ちょうど寒河江さんの研究テーマについて詳しく書いてあったから一度読んでみると良いわよ。」と言われ、その本を手にとると新たな知識を得ることもありました。このように、本を媒介にお互いの意見や感想を述べたりすることを通して友人の輪も広がりました。

さらに修士課程では、自分の研究テーマに関連する本を読むことが多いのですが、院生との会話を通して、自分の研究テーマ以外の本などを読むことから新たな発見にもつながります。研究テーマ以外の本を読むという行為は、論文を書くにあたっては非常に遠回りの行動のように考えられがちですが、むしろその考え方は反対だと思います。自分の研究を違う方向から考えられる良いチャンスにもなるのです。その新たな発見が、さらに友達との交流を深めるときの話題にもなるのです。

まさに本は、私たちの心と心を繋ぐ重要な役割をしていることを、この白梅学園大学大学院に在籍できたおかげで再認識できたようにも思えます。そして、どんなときでも必要な本が収められている白梅学園の図書館の環境は素晴らしいと思います。

今後も本を通して様々な人たちとかかわりを持つと共に、自分の研究がより良いものになるためにも多くの本を読みながら邁進していきたいと考えています。

籍が豊富であることです。そして最新刊行の書籍が次々に購入されるので、公共図書館などと比較すると、専門分野の学習に有効な文献・資料が数多く揃います。また学術の専門書は高価なものも多く、個人での購入は負担が大きなものになりますが、多くの人達の活用が予測される書籍でしたら、大学図書館に購入依頼を申請することが可能です。それによって学生の視点で必要とする蔵書が増加することになります。「読みたい本が見つからない」と嘆くのではなく、学生の動き掛けによって「読みたい本が揃う図書館」にしていくことも大切なことではないかと思っています。

大学図書館には、一人一人の学生の学びを豊かなものにする環境が整っています。是非多くの学生が利用・活用されることを願っています。

感受性を磨く場所

保育科 卒業生 黒田 美希

図書館との出会いは中学生の時だ。小学校とは違い中間テストや期末テストが始まり、どうやって勉強しているのか分からなかった。その時、たまたま行った図書館で社会科の暗記を集中して出来た。そのことが、図書館との出会いだったと思う。それ以降、私の勉強方法は家ではなく、図書館で行うようになり好きな教科も社会科になった。今では休日を図書館で過ごすことも多く、私にとって図書館はなくてはならない存在である。

私は、地域の図書館よりも大学図書館が好きだ。なぜなら地域の図書館とは違い、学生の図書館であることをはじめ、読んだ本について友人や先生方と話しが出来るからである。図書館にいと、友人や先生方と会う機会も多く、課題や授業について話しをすることはもちろん、書籍を探す姿や勉強熱心な友人の姿が刺激になる。また、図書館にはそれぞれの分野において専門的な書籍があり、そのルーツについて調べたり、分野のつながりについて調べたりすることが出来る。同時に大学図書館で試験勉強をしたり、課題図書を読んだりしていると疑問に思ったことをすぐに調べられ、授業に対する理解が深まると感じている。私は、そ

こで得た知識や発見を友人や先生方と話し、自分の学びにする過程が一番の楽しみである。大学図書館には、書籍や人との出会いだけではない私の感受性を磨くものが沢山隠れているように感じる。私にとって大学は、学問の最高機関であると同時に生活の場所である。2年間という短い期間ではあるが、私の生活の一部であり、保育の土台をつくる場所である。おおげさかもしれないが、一つの文化を形成する場所のようにも思う。その中で、図書館の役割は大きく、私の学びの土台を形成してくれた場所であると実感している。

現在、私にとって図書館は勉強する場所以上のものを与えてくれる。大学図書館の素晴らしさはもちろん、大好きな作家の本を見つける楽しさ、難しい分野の本棚でパラパラとページをめくる豪快さ、無意識に手にとった本との出会い等、私にとって図書館は自由な考え方や時間を保障してくれる場所になった。これからは、一人で図書館の魅力を感じるのではなく、多くの方々に図書館を身近に感じてもらえるよう、その魅力を伝えていきたい。



●●●図書・文庫貸出ベスト 10 ●●● (2010 / 1 / 1 ~ 2010 / 12 / 31)

順位	回数	書名
1位	23回	子どもが語る施設の暮らし 2
2位	20回	子どもが語る施設の暮らし
2位	20回	障害児の発達と保育
4位	16回	かいじゅうたちのいるところ
5位	15回	もう施設には帰らない
5位	15回	施設で育った子どもたちの居場所
5位	15回	はらべこあおむし
8位	13回	いつか愛を知る日のために
9位	12回	手あそび歌あそび DVDのお手本つき
9位	12回	かあさんのおいある乳児院の光と影の物語

2010年は施設実習の課題図書が上位となっています。「かいじゅうたちのいるところ」は映画化の影響か、人気急上昇でした（図書館にもDVDが所蔵されています）。

●●●ビデオ・DVD 閲覧ベスト 10 ●●● (2010 / 1 / 1 ~ 2010 / 12 / 31)

順位	回数	書名
1位	87回	着信アリ 2
2位	70回	耳をすませば
3位	63回	着信アリ
4位	60回	着信アリFinal
5位	46回	ハウルの動く城
6位	44回	ふしぎの国のアリス (ディズニー)
7位	40回	恋空
8位	33回	モンスターズ・インク
9位	32回	ヘラクレス (ディズニー)
10位	29回	ZOO
10位	29回	チャーリーとチョコレート工場

昨年に引き続き、「着信アリ」シリーズが人気です。図書館にはエンターテインメントだけでなく、自閉症児を題材にしたマンガ「光とともに…」のドラマ版等、日頃の勉強に結びつく資料も所蔵されています。是非ご利用下さい。